

## はじめに

この現代社会で、お金はなぜこれほどまでに強力に人の心を支配するまでになったのだろうか？  
お金が入の心を両極に二分してしまうのはなぜだろう？

お金の売買市場、すなわち金融市場が周期的に破綻を来すのはなぜだろう？

本書を執筆する前に、私は『マネー崩壊<sup>\*</sup>』という本を出したが、その最終段階で、以上のような重大な疑問がこれまでほとんど取り上げられていないことに気づいた。そして一冊の本にするだけの価値があると考えた。

## 最後のタイ

貧富の差、守銭奴、頹廢、不道德、犯罪……。お金は欠点だけである。私はこの本で、そんなお金に絡む人間の深層心理へと読者を案内する。そして、お金が社会を突き動かす強力な起爆剤になり

得る理由も述べる。

ああ、お金なるもの、それは西洋社会に残された最後のタブーのひとつであった。これを理解するには、私たちはまず自分の内なる感情と向かい合い、西洋社会最後のタブーを意識の表面へ引きずり出す必要がある。

ところがタブーについて話すと、とんでもないリスクを背負うことになりかねない。社会の影の部分を指摘すれば、当然ながら大勢の人の感情を逆なですることになるからだ。

お金をテーマとした本の中で、人の情緒とそのルーツについて述べるのは、あまり一般的なアプローチとは言えない。なのに、この私が、あえてお金に関わる人間の情緒をあばき出そうとするのはなぜなのか？ そしてタブーについて述べるのはなぜなのか？

お金が「外」の人間社会に根を張っている仕組みを本当に理解するには、お金が私たちの「内」にある情緒とどうつながっているかに光を当てなければならぬ。そしてこの外と内の関係を一つの因果関係として見る必要もある。究極のところ、お金という化け物を動かしているのは人間の心理なのである。

前著『マネー崩壊』で、高度情報時代の訪れとともにお金のスタイル（電子マネーや電子財布）が変化し、ヨーロッパの単一通貨であるユーロのようにお金の地理的範囲が変わっていき、ついには私たちの暗黙の合意事項（発行者・発行目的・お金に染みついた情緒・お金が助長する社会的行動など）までも変わる、と私は予測した。

事実、世界では二五〇〇以上ものコミュニティが独自の地域通貨システムを持っており、私が述べ

たような変化はすでに起こっているのである。これらのマネーシステムは、現行の国単位の通貨（法定通貨）に取って代わるか、少なくとも補足するものにはなるであろう。お金の新しいあり方は、ついには地域社会を癒し、働きがいのある仕事を生み出し、自然環境を維持し、高齢化社会の老人ケアを改善するなど、従来のマネーシステムでは不可能だった難問を解決していく。

### 無限の富

お金の新しいスタイルが制度的に導入されれば、次世代までに必ず「尽きることのない富」を生み出せるであろう。「尽きることのない富」とは、資源を将来にわたって浪費することなく、社会を繁栄させ、人間を物心両面から成長させるプロセスである。前著『マネー崩壊』のコンセプトに関係するものはすべて、本書の第 2 部の導入部に盛り込んだので、ご覧いただきたい。

ところで、根本的な問題点が一つだけ残っていることをここで述べておきたい。それは「現在進んでいるマネー革命は短期的なものなのか、それともお金が本質的に変貌しようとしている兆しなのか」という点である。もし「お金が今、劇的に変わろうとしている」とするならば、そう考える根拠は何なのか？

「お金がドラマチックに変貌を遂げつつある」などと言えば、頭がおかしいんじゃないかと思われるかもしれない。なにしろお金のスタイルは、何百年もの間、何も変化しなかったのだから。

実際、世界の国々は、政治や文化の背景が異なっても、お金の存在を当然のものとして受け入れてきた。一七八九年にはフランスで、一九一七年にはロシアで革命が起き、それまでの制度はほとんど

囲み記事は、登場する事物に関する追加的な洞察や顕著な逸話を紹介するものである。お急ぎの向きは、飛ばしていただいても、主たる論議の理解を損なうことはない。

本書はまた、画像（イメージ）にあふれており、それらは本文に並んで雄弁である。なぜなら、集団的情緒を説明する元型は本来イメージなのだから。この画像と本文の連携はまた、私たちの二つの相補的情報システム、右脳と左脳の情報の統合という、ここではことに望ましいことを実践するものである。

すべて覆されたが、お金だけはなくならなかった。

フランスもロシアも法体系を大胆に変えた。フランスは測量法を改定してメートル法を用い、暦まで変えようとした。ロシアは個人所有という概念そのものをなくし、銀行まで国営にした。フランスもロシアも新しいモットーと新しいヒーローを刻み込んだ貨幣を新たに発行した。にもかかわらずお金はそのままのスタイルで存在し続けた。革命の前も後も、欲求を満たすために銀行がお金を発行し、中央政府がこれを管理した。

毛沢東の共産軍が中国を占領したとき、あるいは一〇〇もの発展途上国が独立を勝ち取ってきたこの半世紀の間も、まったく同じことが繰り返された。

だが、二一世紀に入った今、お金には本質的な変化が起きている。お金に起こっている本質的な変化を見極めるには、まず次に挙げる疑問点について考える必要がある。

・新しいマネーシステムへの欲求や必要性は、どこから出てくるのか？

・お金への貪欲さと欠乏感（あらゆる経済学者や賢者が明確に指摘するように）人間の本性と物質的現実をそのまま映し出しているだけなのだろうか？ それとも逆に、欠乏への恐怖と貪欲さは、現行のマネーシステムそのものが人間の意識に投影した集団的情緒なのだろうか？

・お金の話題がタブーなのはなぜか？

・要約すると、**お金が人間の心を揺さぶり動かすのは、いつから始まったのか？ どういうメカニズムなのか？**

こうした疑問点について、私は一つの結論に達した。それは、マネーシステムの正体をはっきりと意識しなさい、ということである。お金は明らかに私たちの情緒を支配している。さらに言えば、私たちの情緒こそがお金の性格を決定付けたのだ。ここをはっきりつかめば、どのようなマネーシステムがよいか、意識的に選ぶことができる。

ユーロ通貨の発行でヨーロッパが冒険的な実験に突入した。目の前の現実だけにとらわれていると足元が危うくなる。金融危機がヨーロッパ大陸全土の経済を揺るがせている。どういうマネーシステムを採るか、意識的な選択が、これほど火急の問題となった時代はかつてないのである。

\* \* \*

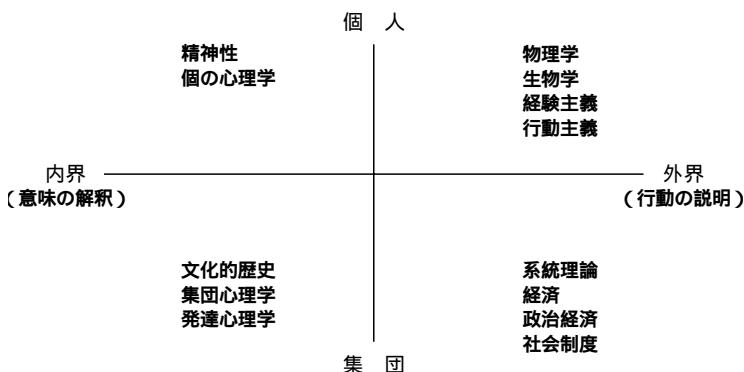
アメリカの哲学者ケン・ウィルバーは、すべての知識に当てはまるシンブルかつパワフルな枠組みを考えた。この枠組みは本書と前著『マネー崩壊』にも当てはめることが可能だった。

ウィルバーは知識の構成を四分割し、そこに内界（意味の解釈を目的とする領域）と外界（行動の説明を目的とする領域）という二つの大きな区分をつけ、その対極に個人と集団を位置付けた。（図1参照）。

たとえば物理学、生物学、行動・経験科学などは、すべて右上の象限（外界 個人の領域）に属する。反対に思想家オーロピンド・ゴージュや哲学者のプロティノス、そして仏陀など精神的伝統に関わる人々、あるいはフロイトやピアジェら個人心理に焦点を置くものは、すべて左上の象限（個人 内界の領域に相当）に入る。同様にシステム理論、経済学、政治経済学あるいは社会制度の一般研究は右下の象限（外界 集団の領域）の範疇になる。最後に文化的歴史、集団心理学、あるいは発達心理学などは左下の象限（内界 集団の領域）に入る。

お金から発生する現象に対する私たちの知識も、同じ四つの象限で説明できる（図2参照）。たとえば右上の象限（外界 個人の領域）は、個人がどうやって収入を得たり、そのお金をどのように投資するかを説明している。ただし、

図1 ケン・ウィルバーによる知識の四象限<sup>1)</sup>



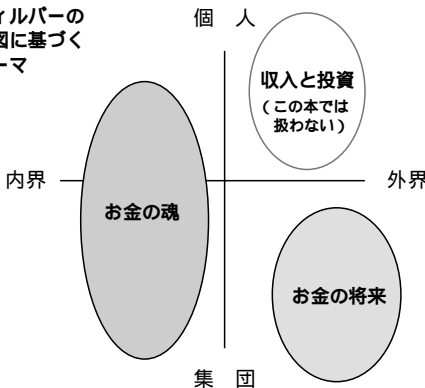
この本ではこの象限に触れない。なぜなら、決してトピックとして面白くないからではなく、すでに多くの著書が出ているからだ。そこでこの本では、あまり話題にされてこなかった残りの三つの象限に焦点を当てることにした。

### お金の集団的意識

前著『マネー崩壊』では、社会という次元でお金を扱い、システム全体の分析を主なアプローチとしたが、本書では、元型心理学を基礎に、個人と集団の金銭心理を探る。本書のタイトルを *Soul of Money*\* にしたのは、つまり、お金のルーツ、お金の心理学がテーマだからである。

ここで注目してもらいたいのだが、このようにして心の内部からマネーシステムを見るのはまったく新しいアプローチである。特にお金に対する集団的意識の思索はいまだになされていないのが現状である。したがって本書に示す資料は、まだ手を染めたばかりの段階にあるものだ。これはひとつの冒険であり、今まで白日の下にさらされることのなかった証拠を明らかにするためのものだと考えていただければ幸いです。

図2 ケン・ウィルバーの四象限地図に基づくお金のテーマ



ある。いずれにしろ、この分野ではさらなる研究と思索を続けるつもりでいる。

米国カリフォルニア州ミルバレーにて

ベルナルド・リエター